
無条件で受け入れてくれるという安らぎ

大橋 秀人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無条件で受け入れてくれるという安らぎ

【Nコード】

N4140J

【作者名】

大橋 秀人

【あらすじ】

冴えない婚約者に憤る女性。一度別れて再び付き合うまでの空白の一年に罪悪感を持つ彼女が婚約者と元彼を比べる・・・

今朝の天気予報では、今日一日は晴れ間もなく、この冬一番の寒さになるだろうとのことだった。

「なにもこんな日にこんなところまで出掛けて来なくてもよかったのよ」

実際、晴れ間のなかった一日を振り返り、真紀は言う。

彼女と付き合って十年になる昌樹は、肩を落としながらも終電に間に合うよう足取りを早めている。

二人は今年から始めていた結婚式の式場探しに軽井沢まで来ていたのだった。

「軽井沢の式は基本的に真夏にやるものなのに、なんで急に見にきたいなんていったのよ」

責めるような言葉にも昌樹は口を開かない。

「どこの式場だって雪で埋まって見れたものじゃなかったわ」

「悪かったよ」

「謝ればなんでも済むと思ってるのよ、あなたは」

遅くまで歩いて疲れきっていたが、辺りが暗くなると車の通りがなくなり、タクシーを捕まえることもできなかった。

除雪された道に薄い雪が積もろうとする中、二人は歩いて駅に向かう他なかった。

「駅が見えてきた」

明るく昌樹は言う。

「終電に間に合わなかったら許さないからね」

喧嘩腰に彼を睨む真紀は、一人で足を早める。

「終電には間に合うみたいだな」

路線図と時刻表を見ながら昌樹は言う。

「終電で帰るつもりなんてなかったのに」

嫌味を持たせて改札をくぐる真紀の背を彼は追った。

構内の売店でおにぎりやパンを買い込み、昌樹は待合室で待つ真紀に届けた。

小さな待合はストーブが焚かれていたが、十分暖められているわけでもなく、寒さなのか、彼女は身を縮めていた。

「まだ来ないの？」

熱い缶のコーンスープを受取り、真紀は訊く。
電車が来るまで、まだ相当時間があつた。

「もうちょっと」

だから昌樹は、そう答えるしかない。

妙に静まりかえった待合室で、二人はパンを千切る。細かく、出来るだけ時間をかけて口に運ぶ。辺りは暗く、雪に閉ざされているのがわかる。

「なにか話さないよ」

ぶつきらぼうな要求にも、昌樹は真面目に話題を探す。体は疲れていたが、底冷えする待合では眠るに眠れない。

「俺たち、付き合い始めてもう十年だな」

「なに？ プロポーズなら一回で十分だから」

真紀の言葉に、そういえばプロポーズの時もこんな出だしだったと思ひ、彼は苦笑する。

「いや、十年前のことってどのくらい憶えてるかなと思って」

十年前、二人はまだ大学生だった。

昌樹は二十歳で、真紀が二十一。

付き合いきつかけは、真紀の失恋にあった。

傷心の彼女の側にいたのが彼で、ただそれだけの理由で二人は付き合い合うことになった。

当時から昌樹は【優しいだけの男】で、だからこそ真紀は素直にその胸を借りられたとも言える。

「私は信也が好きだった」

長い間引きずった男の名前を軽々しく口にだし、真紀は昌樹の反応を窺う。

「今でも好き？」

「ええ」

彼の問いに、彼女はそう答える。

二人の関係が変わるとき、そこには常に信也の名があった。十年前に彼女と別れたのも、二年前に真紀と昌樹の仲を裂いたのも、信也だった。

当時、真紀は八年付き合っていた昌樹とあっさり別れた。

昌樹の前から姿を消した真紀だったが、一年前にひょっこり彼の前に姿を表した彼女を、彼が拒むことはなかった。

「私がいなかった一年間、なにしてた？」

雪の降る音が聞こえる待合で、ストーブの火をみながら真紀は問う。それは再び付き合いはじめてからこれまで、避けられ続けてきた問いだった。

「おれは、特に変わったことはなかったな。あ、前より残業を増やしてみたりしたか」

彼の一年を頭に想い描き、真紀は微笑む。
まったくつまらない男だ。

「私がいなくて、寂しくなかった？」

「寂しくなかったと言えば、嘘になるな」

「戻ってこなかったら、どうしてたのよ」

きつと、ずっと待ってたと思う、と答える姿を想像すると、

「ずっと待ってたと思う」

と予想通りの答えが返ってくる。

苦笑しながら真紀は電車のアナウンスに耳を傾ける。

行き先違いの電車が、ホームに滑り込んでくる。

「一年間、なにしてたと思う？」

ゆっくりと走り出す電車を見ながら彼女は訊く。

言いながら彼女は、自身の一年を振り返っていた。

信也との、刺激に溢れた一年。

彼はデートの場所やプレゼントはもちろん、普段の会話の一言一言まで、昌樹とはまるでセンスの違う選び方をする。

恐らく二人の脳は、似て非なる作りをしているにちがいない。

よく真紀はそう思ったものだ。

「わからない」

と昌樹は答えるが、信也なら同じ質問にも明確でユーモアに富んだ答えを返してくるだろう。

ホームから電車を迎える音楽が流れ、漸く二人の乗る最終電車が来

ると言うアナウンスが流れる。
真紀が立つと、昌樹も立った。
大きなバッグなどの荷物は全て彼がもっている。

「私が一年間、なにしてたか気にならないの？」

電車に乗り込み、座席に腰かけると真紀は訊いた。

「気にならないわけじゃないよ」

「じゃあ、なんで聞かないのよ」

「聞いたって、何も変わらないだろ？」

信也との一年に後悔しているわけではなかったが、昌樹に対して後ろめたさが残っている真紀は、容認するより、いつそのこと問いただしてほしかった。

だが同時に、昌樹がそんなことを決してしないことも、彼女には分かっていた。

それこそが昌樹との結婚を決意した所以でもある。

彼には、刺激的だがそれだけの信也より、深い包容力があつた。

どんなことでも包み込む優しさ。

優しいだけで、おもしろくもなんともない男。

だが、全てを優しさで包み込める男。

「毎日イタリアンだと飽きるしね」

醤油顔に呟くと、昌樹は困った顔をする。

冬の電車の席は熱いくらいで、下からポカポカと二人を暖める。

「着いたら起こして」

ぶつきらぼうに言い、昌樹に体を寄せる真紀の口許は緩んでいた。

ここに安心して体を預けられる人がいる。

この人はいつでも私を受け入れてくれる。

無条件で受け入れてくれるという安らぎ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4140j/>

無条件で受け入れてくれるという安らぎ

2010年10月11日22時31分発行